



早稲田実業学校に
人生修養の基本を学ぶ



koberyol

私は昭和2年6月、青森県弘前市で出生した。父の名を「良太郎」といい、母「みえ」はともに弘前市の出身である。

私の両親は善良なる庶民であり、子供の教育には熱心であった。それぞれもうすでに亡くなって久しい。私の兄弟は4人で、私は長男であるが、次男は私よりも早く死去した。いま、私は神戸で暮らしており、妹と末の弟は東京でふたりとも健在である。

話を昔に、昭和のはじめに戻そう。

私の精神の核をつくったのは早実こと、早稲田実業学校だったと今日でも深く得心しているが、その話にはいる前に、私にとって思い出深い、個人的な「精神修養事始め」についてふれてみようかと思う。

話は幼少期にさかのぼる。

小学校1年生の頃に落ち着かない性格だった私に、……両親が心配したのだろう、精神修養として書道でも習わせたのだろうかという話になり、私塾に行かされることになった。

指導していただいた先生はT先生という方であって、自宅から20分ほど離れた場所まで習いにいったことと記憶する。私は学校の放課後、子供を塾に通わせる習慣のなかった昭和のはじめ、当時としては極めて珍しく塾に通ったのだった。そしてT先生は勉強より、精神修養を重んじるタイプの人であったかと思う。

この私塾に通ったことが、いま思えば、表題にも記したが、人生の基本を学んだまず最初のごとだったと思う。

そして早稲田実業学校に入学することができ、ここでさらに人生の多くの基本を学ぶこととなったのである。

※

早実に入学したのは昭和16年4月である。早実の校是（その学校の教育上の根本精神）は校歌にもうたわれた「去華就実（キョカシュウジツ、…華やかなよそおいを捨て去り、実を取り、中身の充実をはかる、といった意味合いかと思う）」である。

学校創立時には「去華就実」が校是であった由と聞いていた。この言葉のルーツは日露戦争においては連合艦隊を率い、バルチック艦隊を一方的に破った東郷平八郎師の「務実去華」からいただいたそうで、大隈重信侯の「実学」と、2代目校長である天野為之（ためゆき）先生の「

儉約」との両意を合わせ持ったとのことである。

繰り返すが、「三敬主義」とは、明治43年頃に天野先生が作られた校是である。在校中はこれをメインとして、教訓を叩き込まれたものだった。

在学中、校庭の天野先生の胸像の土台に刻まれていた以下の文言をしばしば目にしたものである。文言はつぎのようであった。

「昭和9年 敬他敬己敬事物謂之三敬主義是諸子入徳門宣躬行…他を敬し己を敬し物事を敬す。これを三敬主義という。

これ諸子徳に入るの門あり。宜しく躬を以てこれを行うべし」とある。

私にとって早実で出会った、この三敬主義はまさしく私自身の精神修養の核心となるものだった。

では、「三敬主義」とは何なのか、次につまびらかにしたい。

- ①「他を敬うについて」。人様には迷惑をかけないこと。
- ②「己を敬う」については、身体の自己管理が不備では説得力に欠ける。己を大切にできないものが、規範とはなり得ないからである。このような率先垂範の精神こそ肝要といえる。
- ③「事物を敬う」については、物を大切にすること。これを尊びその恩恵に感謝し、生かして働かせることができる人であること。

※

あと余録と呼べるほどのものではないが、青春時代の学び舎と、その周辺について思い出すままに記憶の断片を、ここに徒然なるままに書き残しておきたいと思う。

さて、学校では友達ができた。同級生のUくんと親しくなった。

ちょうど春には榆の木の梢に黄色い花が咲き、木造校舎の2階にある窓際の私の机からよく見えた。

そこからは実際、野鳥のヒワを複数見ることができ、野鳥をみるのが好きだった私は、この校舎にいることを感謝したくらいだった。

校庭には、八重桜の花が、柔道場、剣道場、兵器庫のそばにあったことも鮮明に記憶している。

校門を出てすぐに「実業堂」という屋号で、文具を中心に商うよろず商店があった。そこから学生の街「早稲田」が広がっていた。

本屋が何件も並び、学生相手の帽子屋・靴屋・喫茶店・食堂などがひしめいていた。

学校の所在地である鶴巻町を一步出ると、「都の西北、早稲田の杜」である大隈講堂のそびえ立つ時計塔や、林立する大学の校舎、正門前に広がる広場などがあつた。

この界限からは、いつも知性の香りがするような幸せな感じをいっぱい浴び、私も胸を張って歩いたものである

今、スマートフォン端末機が流行して、世の中、携帯電話を持たない人はいない時代になった。しかしだからこそ思うのである。

昔の物を見直して今に生かすことはできないだろうか、と。

古き良きものを、私たちの生活の基本にできないだろうか。

闇雲に近代化したり、流行に踊らされたりするのが必ずしも良いとは限らない。確かにモノの流れは新しく便利なものが、今後も大いに普及し、私たちの生活を豊かに彩ってくれるだろう。

とはいえ、その反面、不安な社会が生まれ、人間生活は窮屈になってきている。

ふるきをたずね、大事にし、自らの生活に活かしていくことこそ、これからの社会を作り出していく先人を尊ぶ基本姿勢は、それこそ三敬主義の真髓をなすのではないか、と思う。

今、私はこの時代にふさわしい、新たなよそおいの三敬主義について思いを馳せているところである。